

令和2年度 上田市立本原小学校 自己評価シート 最終報告

学校教育目標	めざす子ども像
<p>なかよく たくましく かんがえて</p>	○地域を愛し、自分が好きで、人にやさしく思いやりのある子ども
	○粘り強く考えられる学習意欲の高い子ども
	○堂々と挨拶や考えを言えたり、自分に自信を持って取り組んだりできる前向きな子ども
【令和2年度の基本理念】 学ぶ喜びを感じ、 明日を楽しみに来る学校	本年度の重点目標
	もつとかんがえる： ○自分で考え、話して考え、聞いて考え、考えを深めていく子ども
	○考えや思いを伝える子ども(学び)
	心をこめて伝える： ○相手を大切にしていることを伝える子ども(あいさつ・コミュニケーション)

分野	重点活動	学校評価の中核的観点
教 育 活	なかよく 大切に 学級づくり・ 学校づくり	○子ども同士、子どもと教師が人権感覚を磨いているか。(あいさつ、あたたかなことば遣い等)
		○子どもが自己肯定感を高めているか。(自分が好き、自分に自信がある、自分でがんばる等)
		○いじめや不登校を解決に導き、楽しい学校づくりができたか。(いじめを見ぬく、長期欠席に真摯に対応する)
	たくましく 意識の育成と体力の向上	○健康への意識を高める工夫ができたか。(保健体育・外遊び・運動集会の充実)
		○安心・安全な生活環境づくりの工夫ができたか。(保健指導、環境整備)
		○健康・安心・安全の意識の育成と体力の向上

総合評価	
○児童会では「広げようみんなの笑顔とみんなの気持ち～あいさつ・きまり・やさしさ～」をスローガンとし、コロナ禍での活動を工夫した。全校が集まる集会ではなく、たてわり班活動を充実させ、さまざまな遊びを取り入れ、学年を越えた活動をする中で、年下の友達を思いやる子どもたちの姿がたくさん見られた。あいさつもよく出来るようになってきた。また、たてわり班ごとに育てたマリールールのプランターを地域に置かせていただき、地域との関わりを継続することもできた。	
○新型コロナウイルス感染拡大防止による臨時休校があり、本格的に学校再開したのが6月であった。再開直後は学校生活への適応や学習進捗の遅れ、体力の低下が気になったが、夏休み短縮による授業時数確保や朝のドリル学習の充実等により、学習進捗も通常どおりとなり、生活リズム等も回復してきた。子どもたちは体力も戻り、意欲的に活動に取り組んでいる。学校行事は縮小、あるいは中止が余儀なくされたものもあったが、方法や時期を工夫して実施することにより、全体としては充実した活動を行うことができた。子どもたちの学校自己評価アンケートでは「学校が楽しい」の項目の評価が90%を越えた。	
○自己肯定感について、「じぶんのいいところは？」と聞かれると答えられない子どもがいたが、小さくても成功体験を積むことで少しずつ自分を認めて好きになっている様子が見られた。叱る場面もあったが、感情的になるのではなく、子ども達に伝わる言い方、視覚支援など工夫していきたい。また、関係ができていからこそ成り立つ指導もあり、廊下を走っている子への指導、時間を守ることについては、学校全体で意識をそろえてやっていきたい。その子どもに寄りそいながら関わり、その子自身の高まりを認め、共感する支援を大切にしていきたい。	
評価 成果と課題	改善策・向上策
B ○友だちの考えを聞きながら、考え方が深まっていく様子が見られた。また、友だちの考えを参考にして自分の考えをまとめ、自分の言葉で伝えようとする姿が増えている。 ○困ったときにどう行動するか、自分の考えが言えるまで待つようにしたが、こうしてほしいということをしる言えない子どもや、考え方を問うことでプレッシャーになってしまう子どももいる。	・考えを深めるような授業構想をしていくことを大切にしていこう。特に、ここだけはじっくり考えさせたいという場面にポイントを絞り、考えさせることも必要である。また、机間支援により、子どもたちと対話しながら考えを深めることができるような支援の工夫もしていきたい。
B ○自分からあいさつをしたり、ありがとうを伝えたり、友だちの話をよく聞いたりする子どもも増え、「同じ」「似ている」と反応することも見られる。 ○自分の考えを言うことに意欲的だが、友だちの話をしっかり聞けなかったり、相手にしっかりと伝わるあいさつにまでいかない子どももいる。	・一人一人の意見や考えを受けとめるスタンスを大切にしていきたい。子どもが考えたことに共感しながら、子どもたち同士がつながっていきような立ち位置に立って支援していく。 ・まずは大人がよいモデルとなり、笑顔と明るい声を心がける。

評価	改善策・向上策
B ○「ちくちく言葉」と「ふわふわ言葉」について学習したことで、できるだけ「ふわふわ言葉」を使おうという意識がある。 ○朝のあいさつを自分から言って教室に入ってくる子どもは増えた。しかし友だちを呼び捨てにしたり、「ちくちく言葉」を言ったりするなど気になるところも多い。	○道徳の授業や人権学習を通して、言葉の大切さを伝えていく。 ○仲が良くなってきた反面、軽い気持ちで、相手を傷つける言葉を言ってしまう子どもには、自分が言われて嫌なことは相手に言わないことを日常的に指導していく。
B ○なかよしアンケートや学校自己評価アンケートでは、以前よりも自己肯定感が高くなった子どもが増えた。いろいろな経験を積んだことで少しずつ自信がついている。	・努力や過程を認める声がけを心がけていく。 ・子どもたちと多くの時間、会話をしていくことで、子どもたちのつまづきを把握する。 ・一人ひとりの思いを理解し、スモールステップで認めていく場面を増やしていく。
B ○保護者との連携や支援会議など真摯に対応するよう努力してきた。	・子ども同士の会話や、人間関係の変化など敏感に感じられるように、よく見ていく。 ・欠席した日は、可能な限り、回復の様子等を確認するために連絡を取ることを継続する。 ・自己肯定感が高まっていかない子どもへの支援や関わりの方については、引き続き模索していく。
B ○体を動かすことが好きな子どもが多いので、行事と絡めて目標を持って取り組めるよう、運動集会を充実させた。	・行事等と関連させて、継続的に体を鍛える場を設定していく。
B ○マスク着用、給食中の私語を控えるなどをはじめ、色々な制約の中で、子どもたちはよく取り組んでいる。新型コロナウイルス対策のために、手洗いうがいはかなり習慣が身につけているが、ついソーシャルディスタンスを忘れて、距離が近くなってしまうことも見られる。	・日常生活の中だけでなく、授業の中でもコロナなどのことについて学習していく。

動		○清掃や係活動など働くことに積極的に取り組めるよう働きかけているか。
	かんがえて	○「かんがえるくん」(もったかんがえるための掲示)を活用し、考えを深める授業を工夫しているか。
		○「つたえちゃん」(心をこめて伝えるための掲示)を活用し、対話したり思いや意図を話したりする授業を工夫しているか。
	○すべて(S)の子ども(K)の学び(M)が充実する授業づくり(SKM 充実授業)	○すべての子どもの力を更に伸ばすような授業実践をしているか。(ユニバーサルデザイン化、教室環境、教材準備等)
学校運営	○様々な教育活動・体験活動を通し、豊かな心の育成	○「原っ子応援団(学習支援ボランティア)と連携し、地域に根ざした活動の場を設け、体験活動を充実させたか。
		○児童会活動、縦割り班等の交流を通して、積極的に体験活動できるよう工夫しているか。
学校運営	○子ども・保護者・地域との信頼関係を深める	○学校だより、学級・学年だより、安心・安全メール、ホームページにより情報を伝えているか。
		○連絡帳、電話などで保護者と連絡をとり、信頼関係を深めているか。
		○学校内外の相談体制の周知、受け入れ体制の整備を進めているか。

評価 A…達成できた B…おおむね達成できた C…やや達成できなかった D…達成できなかった

B	○清掃の取り組み方は学級によって差がある。任せられた場所をしっかりと清掃したり、分担の清掃が終わった後に「見つけ清掃」をしたりする子どももあるが、自発的に取り組めない子どもの姿も見られる。	・掃除や係活動については、その意義やルールをしっかりと話し合っている場をつくったり、振り回りカードなどの具体物を活用したりしていく。
B	○どうしてそう思ったのか、自分の考えを伝える子どもが増えている。かんがえるくん(考えるための掲示物)は、学年に応じて活用している。	・視覚的な工夫は大切であり、活用していく。答えだけではなく、そう考えた理由についても語れるように声掛けをしたり、発問の工夫や場の設定等をしていく。
B	○コロナ禍で、ペアやグループでの対話が難しい状況もあったが、内容の吟味、時間配分の考慮等で有効に取り組めるようになった。自分の考えを発表するだけでなく、友だちの考えを踏まえて、発言できるよう繰り返してきた。	・対話については、対面だけでなく、教師を介しての対話、自分との対話等、伝え方を意識して工夫していく。 ・更に理解度が高まるための手立てや、スムーズな個別支援の方法について研究していく。
B	○拡大機器(紙)、デジタル教科書、板書の有効な使い方について、工夫できた。 ○個に応じた教材の提示の工夫が必要である。	・児童1人1台の端末活用に向けて研修し、活用していく。 ・ユニバーサルデザインにおいての具体的な手立てのチェック表を活用し、学校全体で共通した支援を心がけていく。
B	○コロナ禍ではあったが、原っ子応援団(学習ボランティア)の皆様には「新しい生活様式」に沿って支援をしていただいた。生活科・総合、社会科、家庭科、理科等で成果があった。ボランティアの方々には感謝である。	・地域の方のご縁を来年につないでいき、コロナウイルス禍の中でも学校・子どもと共にできる活動を模索していく。
B	○児童委員会では、児童集会や委員会そのものについて活動の制限のあった時期もあったが、たてわり班など、できる範囲での活動を工夫して進めることができた。	・行事の精選とともに、「〇〇週間」といった活動の中で、児童会活動とのバランスを考えていきたい。
B	○学年だより、学校だより、HP更新等、充実させることができた。特に、休校期間中、動画や画像で学校とのつながりを少しでもできるよう工夫した。	・学校やクラスの様子をしっかりと発信できるよう継続していく。 ・個人が特定されないよう、プライバシーには充分配慮していく。
B	○気になる様子等、こまめに電話連絡し共有することができた。	・けがやトラブルについては、その日のうちに家庭にお伝えし、その後の経過や支援の方向について共通理解していけるよう、誠実に対応していく。
A	○特支コーディネーターが相談体制を整えたり、スクールソーシャルワーカーの依頼をしたりして、カウンセリングや、教育相談等が充実できた。	・子どもや保護者の困り感を共有し、具体的にどういう相談を進めていくかを伝え、支援会議や教育相談の場を適時に行えるようにしていく。